

巻頭言

悪事、身に染む。

比較文化学科長 井上 和人

今年（2018年）3月の卒業生が会社を辞めた話を耳にしました。「事務職という約束で会社に入ったのに、実際には倉庫での荷下ろし作業。おまけに、社員寮では、水道の蛇口をひねると、赤い水が出て来るんですって」。ひどい話です。いくら上司に言ってみても、聞く耳持たず。いわゆるブラック企業です。こういう話を紹介すると、「うちなんか、もっとひどいよ」という声が次々あがりそうです。

「その身にそまりては、いかなる悪事も見えぬものなり」（何事も、それに身をそめると、どんなに悪いことかわからなくなるものだ）——大好きな井原西鶴が書いていることばです。『日本永代蔵』巻四の四「茶の十徳も一度に皆」に出てきます。このお話の主人公、小橋の利助はお茶問屋ですが、お茶の「出がらし」を茶葉に混ぜ、水増しして大もうけ、いったんはお店も繁盛します。でも、結局、利助は狂死。その生き様に対する作者西鶴のコメントが、「その身にそまりては……」なのでした。

悪事に身をそめると、そのうちに自分が悪事をはたらいっていることすらわからなくなる。入社したての新入社員は、「この会社、何かヘンだな」と勘づくもの。ですが、年を経るにしたがい、ヘンなことが当たり前になっていく。そのうちに、冒頭に出てきたような、「聞く耳持たず」のブラック上司の出来上がり。

大学でもそう。はじめこそ「こんなことをしてはいけない」と思っていたのに、今では当たり前になってしまっている「悪事」、身に覚えがありませんか？ 過ちては則ち改むるに憚ることなかれ（『論語』学而）。



あるく みる きく しるす (前編)

本学科教員 大越公平

専門分野は文化人類学 (社会人類学、宗教人類学)
担当科目は文化人類学Ⅰ・Ⅱ、民俗学、ゼミナール、他

今年度で定年を迎えます。10の質問をいただきました。日ごろは漠然と思っていることをしっかりとした目標にするためのよい機会です。「Q. ……」には、いただいた質問の言葉そのものを載せています。思いつくまま記してみます。

Q. 何故その分野を研究しようと思いましたか

A. 文化人類学という研究分野があることを初めて知ったのは高等学校1年のときでした。「極北に住むインディアン」という新聞の新刊書紹介記事を読んでもほとんど知識のない状態ではイメージできませんでした。本当に書店にあるのかなあとと思いながら出かけて行くと、新刊書のコーナーにその本がありました。須江(原)ひろ子『極北のインディアン』(現在は「極北のアメリカ先住民」と表現するべきでしょうか。当時はこの言葉が使われていました。)朝日新聞社1965。この本を読むことにより、これまで知ることのなかった人びと(民族)について知識が増えていくことの楽しさを感じた1冊です。文化人類学という学問があることを初めて知った本です。著者が2度目のフィールドワークに出たときに次のような感想を述べています。

ヘヤー・インディアンの生活環境のなかで、水にかえった魚のようにいきいきと生活する自分を感じて嬉しくなる日があった。そうかと思うと、やはり、よその文化を理解しようと努力するさいにつきあたる障害は大きいのだと思い知らされる日が訪れる。第二回目の調査のあいだには、このような二つの感慨を、何回となくくり返し感じるようになった。(136頁)

私も調査地で実感したことですので、とても印象的な叙述です。

Q. 先生にとって民俗学とは？

A. 私の郷里は新潟ですので、民俗学という言葉を知る前に、新潟・長野の山村の暮らしをまとめた江戸時代の民俗誌があることを知っていました。鈴木牧之の『北越雪譜』(岩波文庫 他)です。中学生でした。ただ、古文ですので十分に読めず、絵だけを眺めながら雪のなかの生活は大変な生活だなあと感じた記憶があります。

凡物を視るに眼力の限りありて其外を視るべからず。されば人の肉眼を以雪をみれば一片の鷺毛のごとくなれども、数十百片の雪花を併合て一片の鷺毛を為也。是を驗微鏡で照し視れば、天造の細工したる雪の形状奇々妙々なる事下に図するが如し。 19頁、1978 (1936)

雪の結晶の絵が掲載されていることも関心を持ちました。

民俗学者、柳田國男の文献を読み始めるのは、高等学校の現代国語の教科書に掲載されていた「椿は春の木」というエッセイで、椿が人の力(文化)によって照葉樹林帯の限界を越え、青森の夏泊にも自生していることをテーマとしたラジオ放送のためのエッセイでした。

信仰を持ち運ぶこの類の女旅人は、丹念に処々に実を播き枝を挿し、それが時あって風土に合して成長するのを見て、神霊の意を卜する風があったかと思われま。柳や桜もこの目的に用いられたという例はたくさんありますが、北の雪国に向っては、あるいは椿が最も適していたのではありますまいか。それと言うのもこの木

が霜雪を耐え忍んで、春の歓びを伝えることに鋭敏であったため、上代の朝廷が正月の卯杖・卯槌には、必ず椿の木をお用いなされたのも、またこの植物の名前に木篇に春という字を与えられたのも、決してでたらめでも思いちがえでもなかったらうと思います。

(383頁、『柳田國男全集』2 筑摩書房 1989)

Q. 先生にとって柳田國男とはどんな存在ですか

A. 日本民俗学の講義では、この学問の作り上げた柳田國男の研究を強調してきましたので、この質問があるのでしょうか。私が研究を進めるための「百科事典」でしょうか。研究したいテーマの先行研

究を探るときには、必ず柳田の研究を調べます。文献を通して何かのヒントが得られる存在です。私が大学の学部と大学院で教わった民俗学者は、柳田の教えを受けた人が多く、その先生方の講義で文献にはない柳田國男の人柄を知ることができました。

長野県の飯田市に柳田國男館があり、柳田が主催したかつての談話室を想像させる部屋があります。兵庫県福崎町には柳田の生家が保存された記念館があります。日本の伝統的家族、「イエ」を象徴するともいわれる「田の字型の間取り」を基本とした生家があります。

◎フィールドワークの一齣です。一つひとつ楽しい思い出です。



2003年2月26日
タイ北部、カレンの少年と



2014年3月29日
インドネシア、ボロブドゥール



2014年9月6日
日本文化探訪（沖縄、名護）



2016年12月27日
ミャンマー、バガン

関東学院と私

本学科教員 矢嶋 道文

専門分野は江戸時代の文化(思想)と社会
担当科目は日本文化史他

Q. 残り少ない関東学院での生活ですが、今振り返って率直な感想をお願いします。

A. 入学してから50年目ですが、これで関東学院大学(母校)とのご縁が切れるわけではありませんので、むしろ関東学院大学との新しい関係のスタートと考えています。今のところ、部活指導(空手道部部長)、研究活動(貝原益軒『大和本草』研究)、教育指導(学部・大学院生)、地元での活動(葉山郷土史研究会)を行っています。したがって、大学生活は一旦卒業しますが、継続する部分もあり「残り少ない」という感覚は余りありません。今はひたすら前に進んでいるというところでしょうか。

Q. 比較文化学科の学生の雰囲気は？

A. これはもう「最高」と言わざるを得ません。女子短大教員を経て比較文化学科に移籍してからは、自由な課題で卒論を書かせる喜びに浸った10数年間でした。ゼミだけではなく、授業の全てが楽しく幸せでした。大学院(比較日本文化専攻)も含め釜利谷の自然が育んだ雰囲気なのではないでしょうか。

Q. 「関東学院大学」の良さを聞かせてください。

A. 50年間いましたが、良さは「のんびりしている」ところです。とくに今のキャンパスはそうです。他学部の雰囲気は良くわからないのですが、今をときめく小泉進次郎さん(経済OB)にもそのような雰囲気があるのかもしれない。

Q. 関東学院大学の歴史を、学生時代を含め、見られてきたと思うのですが、変わった点や変わらない点はあるのでしょうか？

A. (1)変わった点：六浦キャンパスが全く変わりました。昨年法学部が小田原からの移転を終え、新しい校舎が完成いたしました。従来の7号館

(50年前の新館)の隣に建てられ、大学としての雰囲気が出来上がったと思います。

(2)変わらない点：校訓「人になれ 奉仕せよ」の尊重と、「のんびりした雰囲気」です。

Q. 葉山の郷土史研究会との活動は今後とも行なっていくのでしょうか？

A. 葉山町が「町制」90周年を迎えた2015(平成27)年、研究会はそれまでの実績をもとに町から依頼された「施行90周年記念『葉山町の歴史とくらし』」を刊行しました。今は2019(平成30)年ですから、6年後の100周年記念誌との関わりが直近の問題です。葉山郷土史研究会「古文書部会」の皆さんが毎年「襖(ふすま)はがし」実習指導に来校されたほか、今年で25回目となる葉山町民大学(本学と提携)など、今後とも葉山町との交流が続くと良いですね。

——— 入学50年目にあたり、このような回答機会を与えてくださったことに心から感謝いたします。思い出の大事な一コマになりそうです。



2017年2月3日(70歳誕生日)の卒業旅行
(13期生と箱根芦ノ湖にて)

2018年ワールドスタディ

西安・北京を訪ねて

本学科教員 鄧 捷

8月の酷暑の中で名著『長安の春』の格調高い文章と苦闘し、慣れない中国語の歌「信天遊」（陝西省の民謡調の流行歌）を覚え、9月3日に学生11名は引率の先生2名とともに中国の西安へ飛んだ。1200年も前に阿倍仲麻呂や空海などの遣唐使が足跡を残した古都西安（長安）は、もうすっかり秋の季節だった。

9月4日に秦の始皇帝陵の兵馬俑、イスラム教徒の礼拝処「清真寺」と「回民街」（イスラム人街）、5日に唐の高僧義浄がインドや東南アジアから持ち帰った仏経を翻訳した場所として有名な小雁塔、西安博物院、「中国最大の石造の書庫」と称される碑林博物館、西安事変の主演張学良の公館、6日

に『西遊記』の三蔵法師として有名な唐の高僧玄奘がインドから持ち帰った仏経や仏像を保存するために建立された大雁塔、そして西安の名門の一つである陝西師範大学を、それぞれ訪問した。数多くの名勝古跡、「びんびん面」などの小麦文化が紡ぎ出す多様な食べ物を堪能したのである。陝西師範大学で日本語を勉強する学生たちと交流会を開き、互いに自国文化を紹介し、日本から持参したお菓子や漫画、雑誌で盛りあがった。大雁塔の上からのぞく、かつての長安を彷彿させる西安の整然とした街並み、師範大の学生たちの流暢な日本語と真剣な眼差しは、深く印象に残ったことであろう。



西安 大雁塔



西安 陝西師範大学の学生との交流会

9月7日に中国の新幹線で首都北京に移動した。翌日に、北方遊牧民族の南下を阻止するために秦の始皇帝から建設が始まり、いくつもの王朝によって修築が繰り返された万里の長城、明の13代の皇帝や皇后などの陵墓群（明の十三陵）の中の定陵地下宮殿、最終日は中国の政治的シンボルである天安門広場、紫禁城と呼ばれた明清朝の王宮だった故宮博物院、皇帝が天に対して祭祀を行った場所の天壇、多くの老舗が残る歴史的な商業地区の前門を、それぞれ訪れた。

現在首都でもある北京は古都の風格を漂わせながら、至る所で荷物チェックがあり、要人が通るたびに足止めされるといったような、権力の

パワーが漲る都市であった。学生が下町の繁華街前門で買ったおもちゃの「パチンコ」は、天安門広場の入場口で「危険物」と見なされて没収されそうになり、菅野先生が電光石火のような手さばきでパチンコを分解し、若い警察を黙らせ、天安門広場に持ち込ませることに成功した出来事は、権力と賢く共存する庶民の都でもある北京を象徴する出来事として忘れ難いものである。

西安北京を訪ねる前に「反日」か「親日」という内気な基準で中国を見がちな学生たちが帰国後に提出したレポートは、中国を多様な視点で観察し、さらに中国を通して日本を見直そうとする内容が多くあった。以下は学生のレポートからいくつか抜粋する。

秦の始皇帝について認識を深めた

坑内の兵馬俑は、秦の始皇帝の葬送の軍隊を模写したもので、秦国軍隊の兵種・編制・戦闘方式・甲冑騎兵や兵卒の装備の研究に貴重な実物資料を提供していることがわかった。……秦の長城は土と石で築かれたが、明の長城は、煉瓦と石で築かれた。この万里の長城は、皇帝の権力によって完成された記念物であり、完成の為に、連年数十万の人力が投入された。その後、この長城は、これ以降の中国において中国と北族とを区別する境界線となったのである。

小寺巧真「始皇帝が遺した場所を巡って感じたこと」



北京 天安門広場にて

「清真寺」と「回民街」をみて中国の多宗教を考えた

初めての中国ということもあり、日本とは全く違う環境で、受けたカルチャーショックはとても大きなものだった。接客態度の酷さや、治安の良し悪しなどの、正直嫌な場面もあった。しかしその分、初めて外国のお金を扱っ



清真寺

たり、外国語を使って現地の人と会話をしたりと、普段全くできないような経験を積むことができたのはとても良かったと思うし、このことを将来に活かせるように過ごしていきたい。そして、中国が多宗教だということにもしっかりと触れることができたのも非常に嬉しかった。博物館でみた門の形をしたヒンドゥー教の石碑や、西安の町や清真寺等、イスラム教が中心だが、多宗教の状況について身をもって理解することができた。

畑陽介「西安清真寺を実際に見て感じたこと」

中国のセキュリティを見て日本の鉄道のセキュリティを考えた

日本と違い中国の鉄道は、新幹線の駅が独立しているため、スペースが広めに確保できるのである。……日本ももっと鉄道のセキュリティについて考えるべきなのでは、と私は思った。今回の研修で、私は中国のセキュリティ強化策は素晴らしいと感じた。空港の様に厳重じゃなくとも、改札を通る際に荷物をX線にかけられる様にして、大まかな中身がわかる様にするなどを導入するのも念頭に入れていいのではと思った。在来線が無理でも、新幹線などの長距離鉄道などでは実施すべきだ、と私は今回中国へ行き感じたのである。

小池恵理香「中国のセキュリティについて」

中国の交通をみて日本の交通問題を考えた

シェアバイクの使用。中国では今電子マネーが流行っていて、なんでも wechat pay や aripay 払いの社会になっている。シェアバイクは携帯でキューアールコードを読み取って wechat pay や aripay で支払い、シェアバイクを利用することができるシステムになっている。このように簡単にシェアバイクを利用できるようになれば、自転車の盗難も少なくなり、これから東京オリンピックで日本はもっとたくさんの観光客が増えるため、利用者数も増えると思ったからである。……こうした普段日本では感じることや見ることができない光景を見ることができ、より一層自分の視野を広げることができた。今回のワールドスタディで、国と国の間にある価値観、人と人の中にある価値観に気づくことができた。その地域によって食べるものや雰囲気・習慣が違うため、考え方も違う。それらを現地で感じる事ができ、自分にとって貴重な体験にできたことを誇りに思っている。

佐藤由美「日本と中国の交通面の違い」

中国の発展とその矛盾を感じた

SNS 面などでは中国は wechat やそれに関連した電子マネーや制度がとても整っていると感じました。スマホさえあれば問題なく生活できる国であるなと感じました。ここに中国の勢いを感じました。ですが、これは決していい方法ではないとも感じました。日本では使える LINE、Twitter、Instagram 等々規制がかけられているものが多いなと感じました。そこで、矛盾を感じたことが一点あります。万里の長城の公式 Instagram、Twitter、Facebook、YouTube があったことです。これは、どれも中国では規制がなされていて閲覧することはできません。ですが、公式として世界へ発信する手段として利用しています。これは、このアプリが世界に対する発信力が大きいということを遠回しではありますが、中国の政府などにも認められているとも言えます。いくら共産党の方針であっても国民から世界へ発信するチャンスを奪うことは、これからの世界を支えていく中国にとって自分達を不利にする行為ではないか？と感じました。

多々良海斗「ワールドスタディに参加して」

中国人の「自由」を見て日本人の「ストレス」を考えた

私は中国の国家の政策である金盾という、インターネットの検閲・規制システムのイメージから勝手に、中国人は国に拘束されていて息苦しい状況の中で生活を送っている人々を想像していました。しかし実際に私が二つの都市を訪れて感じたことは、中国人はとても自由で楽そうだということです。どのような意味で自由で楽そうなのかと言いますと、それは中国に滞在中に多くの場面で感じたことなのですが、勤務中にスマホを触る人が異常に多いということです。……接客業をする人間が店舗に立って自分の世界に入ってしまうことは、日本人の価値観から考えるとあまり良いことではないのは確かです。……日本で働き接客をする従業員は勤務中に私用のためにスマホを触ることは許されていないと思います。私はその光景を見て、中国社会は日本社会よりも寛容で、接客をする人間の立場から考えると、勤務時間中ずっと気を張っている日本人よりもストレスの少ない社会だと感じました。

日本は現在、世界でも比較的に進んだ経済力を持った全体的に豊かな国です。そんな日本だからこそ抱える、中国にはまだない問題が多くあると考えました。その問題の一つが日本のストレス社会だと考えます。……中国のストレスのない働き方と日本の規律を重視した働き方は、どちらも正解であり、その国の特徴ですが、この中国と日本の社会の中間地点を取ることができる社会になれば一番良いと感じました。その中間の社会を創り出すことができるのは二者の慣習や思想、文明から文化まですべてを勘案することができる人間です。日本の社会問題に向き合ったとき、中国の社会様式を日本の社会に取り入れることは大変難しいことですが、実現したときには二者の関係性を明らかにして汲み取るという作業はなんらかの社会問題の解決の糸口になると考えました。

武内瑞樹「中国人と日本人の自由」

案外中国を「綺麗」と感じた

中国の町を歩いているとき、歩道などを見ると日本よりゴミのポイ捨てが少ないと思い町をよく見ながら歩いていたら、町の至る所にゴミ箱が置かれていた。驚くほど多くあり、日本にももっと多くのゴミ箱を街中に置けばポイ捨てする必要もなくなり、町が綺麗に保たれるのにもと思った。正直、中国はあまりきれいな国ではないと勝手に思い込んでいたので、今回見た町の状況に対して日本よりも良いと個人的に思った。

長渡強志「ワールドスタディにて学んだ日本と中国の文化の違い」

食文化の違いを味わえた

中国も箸文化であるため、食べ方についてはあまり困らず過ごすことができました。しかし、箸は日本の箸より長いように感じました。それは円卓の中央まで箸が届くために長く作られているのだと、使用してみても初めて分かりました。テーブルは円卓であったが、それもまた、中国独特の雰囲気です。非常に楽しく食事をすることができました。また、水が白湯であるのが特徴であると感じました。理由としては、白湯は健康に良いというからだを知り、中国国内の健康意識が非常に高いと感じることができました。日本では温かい飲み物はお茶と蕎麦湯くらいしかイメージできません。であるため、非常に新鮮であり、文化の違いを肌で感じる事ができる一つの出来事であったと思います。



徳発長にて餃子を食べる

水井聖哉「中国の食文化」

中国でよく目につくのが果物屋さんです。売っている内容はドリア、ドラゴンフルーツ、桃、梨などが主でした。ほかに、「ナツメ」「ホオズキ」など、中国オリジナルといえるものがありました。ナツメは5～6センチほどのリンゴのような果物で、皮の色が茶色に熟すと食べごろになります。リンゴのような風味とほんのりと甘く、食感もリンゴと似ています。

鈴木達也「中華料理 本場と日本の違い」

日中友好を考えた

中国にいる日本人は凄く少なく、日本人より日本語を学んでいる人の方が多い、西安では日本人は約300人しかおらず、北京や上海などの経済発達の大都市でも10000人ぐらしかいないと聞き、とても驚きました。なぜなら中国は日本の隣国なのに、在住している日本人の数はアメリカやオーストラリアに比べてかなり少ないことが分かったからです。それは中日関係がまだあんまり良くないからではないかと思えます。……関係改善にむけては、特定の政治家に限らず、ビジネスマンや旅行者など一般の国民同士の交流も含めたあらゆるレベルでの対話を積み重ねていくことが、遠いようで一番の近道かと思えます。

薛項坤「中日関係を改善していくために」

2018年度春学期集中講義「外からみた日本」

本年度春学期の集中講義「外からみた日本」は、韓国の韓信大学日本学科教授の河棕文（하종문）先生が担当されました。講義の内容は以下の通りです。

- 2015年度の韓国、日本、アメリカの高校の歴史教科書を素材に「原爆投下の是非について」の討論
- 零戦設計者の堀越二郎を主人公とした宮崎駿監督の「風立ちぬ」から見た大衆文と歴史
- 日韓の間にある歴史認識の重要な問題の一つである日本軍「慰安婦」問題
- BBCが放送した伊藤詩織氏の強姦被害を取材した「Japan's Secret Shame（日本の秘められた恥）」を素材とした「ジェンダーから見る日韓」
- 日本の「武士道」の実体
- 「在日」と日本・韓国
- 韓国人の立場から「日本の憲法改正」をどう見るか？

履修者は30名を超えましたが、その中から2名の学生に受講の感想を寄せてもらいました。

■ 北村愛美（本学科2年）

私はこの集中講義を受けて日韓関係で大きく取り上げられる慰安婦問題や日本の戦争に対する理解を深めて今の時代だからこそ、これを機に歴史と真剣に向き

合い、真実を話していく必要があるのではないかと考えさせられる機会でした。

従軍慰安婦問題をお金で解決するのではなく、日本側が一刻も早く慰安婦の方々に会いに行き、歴史を隠さず話をして認めることだと思います。そして日本が戦争の被爆国として、今の私たちがこの先どのように伝えていくのか改めて考えました。

■ 木梨萌乃（本学科2年）

集中講義を受けてみて、最初はひたすら韓国の文化や歴史について学ぶ授業だと思っていましたが、慰安婦問題や戦争・女性差別問題など、一つ一つ問題を取り上げて、それについてみんなで意見交換をするという授業スタイルでした。私は慰安婦問題などはテレビでのニュースでしか情報が得られていなかったために、韓国と日本だけの問題と認識していましたが、しかし慰安婦問題というのは歴史的にみると大きな問題であるということを知ることができました。今までほかの授業のなかで戦争やジェンダー、在日問題などを勉強したことがありませんでしたが、この講義でまた別の視点でこれら問題について考えることができたなと思いました。

中国での留学生活について

本学科4年 鳥羽 菜摘

私は大学3年の9月から4年の7月まで約10ヶ月間留学をしました。好きな中国語をもっと身につけたいと思い、留学に行くことを決意しました。中国に留学へ行ってからは中国人の学生と語学パートナーとして会話の練習をしたり、積極的に外国人とコミュニケーションの機会を増やすよう意識しました。また現地で中国人に日本の文化を教える授業のボランティアをしたり、語学力の強化と共に日本に対しての理解も深まりました。

ですがその中で困難だったこともたくさんありました。それはタクシーに乗ったときに運転手とコミュニケーションをとることが難しかったことです。来た当初は中国人の話すスピードに慣れておらず、なんて言っているのか分からず、とりあえず自分が話したいことを話すのがやっとという感じでした。まずは慣れることが一番なので私は日々の生活で工夫をし、中国語に慣れることに徹底しました。すると数ヶ月後には中国語の環境に慣れ、最初と比べコミュニケーションをとることが難しくなくなりました。

私はやり遂げると決めたことはきちんとこなし、また留学をすることにより身についた行動力は自信に繋がり、語学力以外にも留学先で知り合った世界中の友達は一生の宝物になりました。留学に比べて本当に良かったです。



ゼミ連インタビュー 私がおすすめします 比較の外国語！

ゼミナール連合（通称 ゼミ連）が第二外国語中級を勉強した学生に訊きました！
なぜその言語を選択したのでしょうか？どのような魅力があるのでしょうか？
（水井聖哉・波多野雅子・岡田莉乃・小寺巧真）

ドイツ語（鈴木佐知子）

Q. 先生の雰囲気は？

厳格です。

Q. どの国で通じる？

スイス(北部)・ドイツ・オーストリアなどで通じます。

Q. 選んだきっかけは？

好きなアイドルグループのメンバーがドイツ出身で、話したかったから。

Q. 何が大変？

日本語とドイツ語の助詞の使い方のギャップに悩みます。

Q. 役に立ったことある？

映画を観て音楽を聴くようにしたら、意味がわかるようになった！



私の好きなドイツ語

Jeder ist seines Glückes Schmied.

（幸福は自分で作り出すもの。）

フランス語（比留川光津伎）

Q. 先生の雰囲気は？

質問になんでも答えてくれる。

Q. どの国で通じる？

フランス・カナダ・ベルギー・コンゴ・セネガルなど。

Q. 選んだきっかけは？

セーシェルという国に行きたいからです。

Q. 何が大変？

.....

Q. 役に立ったことある？

漫画にたまに出てくるフランス語が理解できます。嬉しいです！



私の好きなフランス語

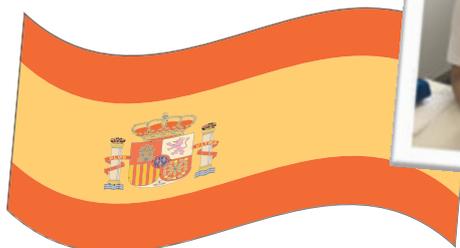
ça va.（元気）

「鯖が好きです・・・」

私の好きなスペイン語

Mil gracias (千のありがとう)

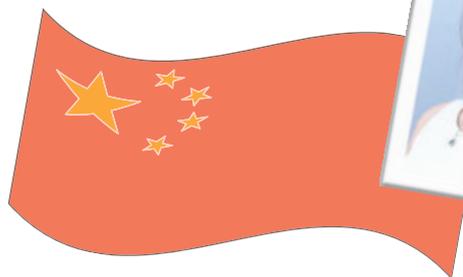
「日本語には無い
良い表現だと思います」



私の好きな中国語

好好活 ハオハオフオ

(しっかり生きよう)



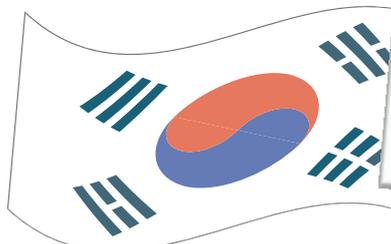
私の好きな韓国語

일소일소 일로일로

イルソイルソ イルロイルロ

(一度笑えば、一度若返る。一度怒れば、一度老いる)

「ポジティブな考え方が
韓国ぽくていい」



スペイン語 (宮野将吾)

Q. 先生の雰囲気は？

留学経験を活かしたおもしろい授業展開が人気である。実は天然という噂。

Q. どの国で通じる？

スペイン・メキシコ・赤道ギニアなど計20ヶ国の公用語。

Q. 選んだきっかけは？

サッカー（レアルマドリド）が好きだから。

Q. 何が大変？

性別による語尾の変化や主語により変わる動詞の使い方が大変です。

Q. 役に立ったことある？

サッカーの試合を見ていると、人名やチーム名の意味が理解でき、とても楽しい。

中国語 (佐藤由美)

Q. 先生の雰囲気は？

とても紳士的。謙虚で丁寧に教えてくれる。

Q. どの国で通じる？

中国、台湾、シンガポール、マレーシアなど。

Q. 選んだきっかけは？

自分にとって馴染みのある言語だから。

Q. 何が大変？

ないです。

Q. 役に立ったことある？

中国に行った時に話せた。

韓国語 (奥深山詠美)

Q. 先生の雰囲気は？

優しく可愛らしい雰囲気の先生。

Q. どの国で通じる？

朝鮮半島。

Q. 選んだきっかけは？

日本語と文法が似ていると聞いたことと、韓国の国民性に興味を持ったから。

Q. 何が大変？

ハングルを覚えるのは楽しいけど、日本語にない発音が多いところ。

Q. 役に立ったことある？

公共の場で韓国語が流れると、わかって嬉しい。韓国人の知り合いと話せるようになった。

韓国留学を終えて

本学科2年 土本 桃花

私は2018年の2月から6月の4か月間、韓国のテジョンにある韓南大学へ留学をしました。この通信で、当時の体験や感想を紹介したいと思います。

まず初めに留学をしようと思った理由についてです。私は高校生の時からK-POPが好きなのがきっかけで韓国語を勉強していました。ですが日本にいるよりも韓国にいる方が沢山韓国語を使う機会があり、その分上達が早くなると考え、留学をしたいと思立ちました。また、大学生活の4年間を、ただ講義を受けるだけの4年間にするのではなく何か特別なことをしたいと思い、その中で留学という候補があったのでしてみようと決めました。

しかし実際留学してみると大変なことが沢山ありました。元々私はリスニングができなかったもので、当然韓国語の授業は韓国語で教わるのですが全く何を言っているのかわからなかったり、トラブルが起きた時も韓国語で対処しなければならなかったり、ルームメイトとの揉め事や、極たまに日本人に対して少し攻撃的な韓国人もいたり戸惑うことが多かったです。ですが辛いことだけではなく、テストでクラス2位を取ったときはやりがいを感じたし、普段生活する中でも見られる些細な文化の違いがあったり、留学中知り合った韓国人と仲良くなったりと楽しかったことも多く、充実した留学生活を送ることが出来たと思います。

また、この4か月は、韓国人だけでなく様々な国の人と関わる機会が沢山ありました。特に中国、台湾、ベトナムなどのアジア圏の人が多く、同じアジア人でもこんなに違う点があるんだと思いました。例えば、限られたSNSしか使えないという中国でのネット環境の現状や、留学をするベトナム人が多いということなど、日本にはもしかしたら知ることがなかつたであろうことを知ることが出来たと思います。そして色々な国の友人ができたので、その国にも興味を持つようになりました。今はベトナムのことを知りたくて東南アジアに関する授業を履修しています。



留学生チューター（右2人）とご飯



「チョンジュでの文化体験研修」韓国伝統家屋集落（ハノンマウル）で韓服（チマチョゴリ）を着る

語学を勉強するにあたって、その言語を使わざるを得ない環境にいるということはとても大事だと思います。また、日本には出来なかった体験も沢山でき、留学前には予想もしなかった出逢いや出来事にも沢山巡り合えて視野が広がりました。4か月という短い期間でしたが、留学をして本当に良かったと思っています。もし今留学をしようか迷っている人がいたら是非勧めたいです。